

令和7年度生徒指導サポート実践校 「特別活動の取組事例」

学校名	尾道市立高須小学校	対象となる主な学年	全学年
取組事例名	「 認め合える集団づくり ～異学年交流～」		

◆ 児童の実態及び取組を通して育てたい児童像	
児童の実態	取組を通して育てたい児童像
本校は、全校児童 699 人 33 学級規模のため、横のつながり（同学年の関わり）は強いが、縦のつながり（学年を超えた関わり）は弱い傾向にあると捉えている。	本校の目指す資質・能力「主体性・協働性・表現力」の内、協働性に焦点を当て、異年齢集団で様々な行事を行うことで、互いに認め合いながら協働できる児童を育てていきたい。



◆ 取組の具体的内容

取組を実施する意図及びねらい

異年齢集団での関わりを年間計画や、学校評価等に位置づけることを通して、長期的な見通しを持って発達支持的生徒指導の充実を図り、全ての児童にとって魅力ある学校運営を目指す。

取組の流れ・創意工夫・児童の変容等

- 職員で共通認識を図る。
交流すること自体が目的化しないよう、まずは生徒指導部会で何度も話し合い、自己肯定感や社会性を育むために行うという共通の目的をもつことを確認した。また、交流の目的や取組を進めていく上で、本校で大切にしたい考え方を明文化し、年度初めに職員に提案することで共通認識のもと取組を進めていくよう工夫した。
- 児童の「やりたい」を大切に取組を進める。

1 異学年交流の目的

- ①自己肯定感・有難さの向上
他者のために頑張る経験やそれを受けられる経験から、自分への自信を育む。
- ②他者の社会性を育む
異なる立場・役割の児童との接点を増やすことで、他者と関わるスキルを高め、関わる喜びを身につける。
- ③学校を越えた特別活動の継続
学校全体の一体感を高め、学校に対する帰属意識や愛着を育む。

2 高須小学校における異学年交流の基本的な考え

- ①楽しいことを始めるのではなく、今までやってきたことと伝統的・計画的に教育活動に取組むこと
慣れ親しいことを始めるのではなく、高須小学校にこれまでたくさんのお力添えをいただいた異学年交流をしてきた実績がある。その取組を真摯に、単発的なもので終わらせるのではなく、年毎に実施した意図的・計画的なものにすることにより、より効果的な効果を目指していく。
- ②「関わる喜び」が獲得できる活動を設定すること
取組が「やらせたい」、「やってほしい」活動ではなく、子どもたちが喜んで「やりたい」と思う活動を設定する。
- ③「継続が育てる」取組と「子どもが選ぶ」取組を両立すること
社会性に関する取組は、教員主導の取組、教員主導で選ぶのではなく、他者と関わり、関わりながら選んでいく。

交流内容	実施時期	主な内容
学校たんけん	4月	2年生が1年生に学校を案内して回る。
ミニ運動会	5月	運動会でを行った表現運動や団体競技をペア学年と楽しむ。児童会長の公約から取組が始まる。
絵本の読み聞かせ	6月	6年生が図工の時間に作成した絵本を1年生に読み聞かせる。
生活科 秋祭り	11月	1年生が生活科で作成したおもちゃで未就学児とふれ合う。
小中合同清掃活動	11月	中学生と合同で高須地域の清掃を行う。小中混合の小グループを作り、ふれ合う時間を最初に設定することで、関わりながら活動することができた。
スポーツきっかけウィーク	12月	体育館を開放し、ペア学年でドッジボールを行ったり、大縄跳びをしたりしてふれ合う。
なわとび週間	1月	体育委員会が主体となり、2月の長縄とび大会に向けて交流の場を作る。ペア学年で練習する様子も見られた。



- 児童がふりかえり、教職員が価値づける。
交流すること自体にも価値はあるが、「他者を巻き込む経験ができたこと」や「自分から関わったこと」「楽しいことを自分たちで作って出したこと」等を振り返り、価値づけることを意識している。また、活動の様子を正面玄関にてスライド放映することを通して、子どもたちや教職員と高須小学校が目指す素敵な姿を共有できるようにしている。

◆ 成果 (○) と課題及び今後に向けて (●)

- 児童アンケート「自分にはよいところがある」に肯定的回答をしている児童 85%を目標値として全校で取り組んでいるが、12月末にアンケートを実施したところ、95%の児童が肯定的回答をしたという結果になっている。
- 児童自身が交流してよかったと思えたり、成長を実感できたりするよう、ふりかえりを充実していく必要があると考えている。